

## 過疎地域における寺院経営の変容と現状：鹿児島県の甌島と種子島の事例を中心に

著者	星野 元興
ファイル(説明)	博士論文全文 博士論文要旨 最終試験結果の要旨 論文審査の要旨
学位授与番号	17701甲人社研第25号
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10232/23698">http://hdl.handle.net/10232/23698</a>

学 位 論 文 の 要 旨	
氏 名	星野 元興
学位論文題目	過疎地域における寺院経営の変容と現状 —鹿児島県の甑島と種子島の事例を中心に—
<p>本論文は、過疎地域における寺院経営の変容と現状を明らかにするために、鹿児島県の甑島、種子島の事例を中心に論じたものである。</p> <p>本論文で問題提起するものは、伝統的な寺院が高度経済成長期を経て過疎が深刻化する地方においてどのように経営され現在にいたっているのかということである。1960年代に人口の都市部への流出が急激に進んだ地方における寺院経営については、度々議論されてきたことである。しかし、その多くは、過疎による檀家の減少による寺院経営への危惧であり、信者の既成宗教離れによる寺院の衰退への警鐘であった。確かに、過疎による檀家の減少や信者の既成宗教離れが寺院経営に与える影響は少なくはない。しかし、従来の研究においては寺院経営への危惧は繰り返し語られるものの、人口が減少する中、どのように寺院が経営されてきたのかという視点では十分な分析はなされていない。その背景には、研究者側の人口の減少、すなわち檀家の減少は当然、寺院経営を圧迫し、最終的には廃寺に向かうものであるという理解によるものではないかと推測される。本論文の問いは、人口減少により当然のように語られる寺院経営への警鐘に一石を投じるものであり、地域社会の一翼を担っている寺院の存在意義を問い直す上で重要な問いであると考えます。</p> <p>本論文の構成は以下のとおりである。</p> <p>第1章では、寺院経営の問題について先行研究をもとに整理し、寺院経営研究の成果と残された課題を明らかにした。また、本研究の視点ならびに調査地として鹿児島県の離島を選択する意義について論じた。</p> <p>第2章では、現代における伝統的寺院の現状について論じた。ここでは、全国的に問題になっている廃寺に焦点をあて、都市部における寺院経営の現状、そして全国的にみて廃寺が多いとされる富山県、広島県の事例より、廃寺の要因が過疎による檀家の減少のみによるものではなく、富山県の寺中制度、広島県のりょう制度の事例から寺院組織の重層的な構造にその直接的な要因があることを指摘した。</p> <p>第3章では、前章で明らかにした寺院経営に対する寺院組織の影響を避けるため明治以降の寺院しか存在しない鹿児島県の事例を取りあげた。その中で、寺院設立の基礎となっ</p>	

た講組織の変化と現状、そして、講の代表であった番役と僧籍を有する住職との違いを明らかにすることにより寺院経営者としての住職の役割について論じた。

第4章では、元々は、住職が常駐する寺院であったが、過疎による生活への不安から2度に渡り住職が寺院を離れ、現在では、代務住職を隣町の住職に依頼しながらも経営を続ける甑島の西楽寺の事例を中心に代務住職寺院の現状について論じた。

第5章では、甑島からの移住者によって種子島各地で1970年代まで集落毎に営まれていたが、現在では、その多くが廃寺となっている「小寺」に着目し、寺院と地域社会の関係について論じた。

第6章では、前章までに取りあげた事例を通じて、過疎地域においても多くの廃寺を確認できない現状を確認し、その要因について考察した。まず、大きな要因として、檀家側のイエに対する意識の高さを指摘した。イエ意識については、先行研究でも語られることではあるが、過疎が進む地域では、いまだイエ意識は強く残る。それは、先祖代々の家業を継ぐ者がいまだ多く、尚且つ、先祖代々の土地に住む者が多いことにある。そして、寺院もまた、「先祖代々の寺院」としてイエ意識の中に組み込まれているのである。しかし、現代では、このイエ意識も薄らぎつつある。そうした状況において先祖祭祀の対象に変化が見られた。それは、これまでの先祖代々の祖先を対象とした先祖祭祀から、両親や祖父母など、よく知る先祖への先祖祭祀と、その追悼の対象が変化しつつあることをあらわす。そのことにより、イエ意識の希薄化が進み、また地域社会が衰退する中においても、檀家や地域住民の手によって寺院は護持されるのである。

第7章では、前章までの事例、考察より結論を導きだした。本論文の結論としては、今まで語られてきた「人口の減少＝廃寺の危機」という議論は間違いではないものの、寺院経営の現状をあらわすには不十分であるとした。それは、人口が著しく減少する離島においても寺院は変わらず護持されていることから指摘したことである。確かに、専従する住職がないという極めて厳しい経営環境にはある。しかし、それでも廃寺となることはないのである。そこには先に示したとおり、「先祖の代々の寺院」と考える檀家があり、また、その先祖がイエの先祖から「地域」の先祖まで広義に捉えられることによる強い結びつきを持つ地域社会があるためである。また、一方でイエ意識の希薄化が議論されるが、それとて先祖祭祀の対象が身近な先祖に変わったことだけのことであり、基本的には先祖祭祀の様相が変わることはない。そのため、過疎地域においても寺院は変わらず護持されているのである。